ハルパロス研究序説

――クロノロギー――

永井康視

【要約】 ハルパロスに関する諸問題は、既に一世紀にわたって論じられてきた。しかし、史料の不足により、なお若干の不明な点あり、クロノロギーに関しては、殆んど確定的な結論を得るには不可能なありさまである。ところが最近、クロノロギーに大きな役割を果す前三二四年のオリュムピア祭の期日が、新しい発見により、明らかにせられた。これに基いてハルパロスの歴史は新らたに書き改められねばならない。それに最近E. Badian (JHSt. 1961, 16 ff.) はすぐれた研究を発表した。しかし、そこにもなおクロノロギーに附加さるべき若干の点を残している。この稿においては、史料及び今日までの研究過程を再吟味し、クロノロギーにおける不備を若干補なってみたいと思う。

一、史料と文献。二、クロノロギーにおける二三の問題。三、ハルパロスのアテーナイ訪問の時期――オーローポス碑文より。四、Hypereides, c. Demosth. col. 18-19 より――Duhn 及び Adams の説――ハルパロスの両アテーナイ訪問。五、Adams 説批判。六、Hyper. c. Demosth. col 18-19 の再吟味――ニカノールのギリシァ到着の時期。七、喜劇「デーロス」より。八、サテュロス劇「アゲーン」をめぐって。九、結。

一

ハルパロス研究は、周知のように、アテーナイのこの頃の歴史を理解するには欠くべからざる課題である。その為、前世紀の中葉より、特に激論がたたかわされて来た。しかし、それに関する第一史料は乏しく、これを補う第二史料も不充分で、[1] 若干の点についてなお意見の一致をみないが、とりわけクロノロギーに関しては多種多様、殆んど確かな結論を出すに不可能なありさまである。

ハルパロスに関しては、古来、デーモステネースが有罪となり、遂にはアテーナイから逃亡するという結果を招く、

所謂ハルパロス裁判との関連から取り上げられてきた。[2]

ところが、一八四七年、ヒュペレイデースの「反デーモステネース論」の断章が、はからずも、パピュロスとして、エジプトより発見されて以来、ハルパロス裁判をめぐる諸研究が続出した。その間、Sauppe の史料批判にはじまり、個別研究としては、特にクロノロギーに関して注目すべきものに Duhn, Holleck, Bauer があった。また Droysen のヘレニズム史、Grote のギリシア史、Schaefer のデーモステネース研究は、該研究に関しても大きな役割を果した。[3] 而してこれらの諸研究に論じられた諸問題に、一応の終結をあたえたものは Ch. D. Adams の研究（The Harpalos Case, TAPhAss. XXXII, 1901, 121–153）であった。

Adams のこの詳細にして鋭い吟味により、デーモステネースは有罪か無罪かという、従来永しく論じられてきたこの裁判に直接関係する諸問題は、一応解決されたかの如く、以後は主として、当時の歴史事象の解釈に、研究の重点は向けられるようになった。Körte, Berve の業績がそれであり、後者は、簡潔に概観的に、しかも種々の問題点を指摘した上、史料をも網羅したすぐれた文献である。また、フランス語の文献では Colin の一連の研究もこれを見過すことができない。[4]

今世紀の二十年代の終り、オーローポス碑文の Mathieu によるすぐれた解釈が現われ、クロノロギー研究に新しい光を投げかけた。[5] 今日このオーローポス碑文を無視しては、ハルパロス事件のクロノロギーを論ずることは許されない。

ハルパロス研究はその後しばらく、現われなかった。ところが最近、クロノロギーに関する重大な新らしい事実が明らかにせられたのである。即ち、この問題に大きな役割を果すべき前三二四年、第一一四回オリュムピア祭の期日が、最近の発見により、その最盛日を八月四日とすることが明らかにされたからである。[6] Sealey（ClRev. 1960, 186）の指摘のように、この発見に基き、ハルパロスの歴史は新たな書きかえが要請されている。そして、新らたにクロノロギーをそれによって試みたのが Badian（JHSt. 1961, 16 ff.）であった。彼はまた、ハルパロスの諸問題を、はじめてアジアの方面から吟味したし、それに関連して更に、最近一連のその研究も、ハルパロス事件に多くの注目すべき問

題を提起している。[7]

ただハルパロス研究には、Badian その人も指摘するように、歴史的側面からなお考察さるべき諸問題が残っているほか、彼のクロノロギー自体にも、若干附け加えねばならぬ点がある。小稿は、在来の研究過程並びに史料を再吟味して、クロノロギーにおける不備を幾分補なおうとするものにほかならない。[8]

二

はじめに、大凡の事件の経過と、クロノロギーに関し二三の問題点を指摘したい。[9]

ハルパロスは、恐らくマケドニア王朝と深い関係をもつエリミオティス家の出身、マハタスの子である。皇太子アレクサンドロスの学友としてマケドニア宮廷に少年の日々を過した。皇太子が父フィリッポス二世と不和を生じた際、（三三七／六年）、ハルパロスは他の学友達と共にマケドニアを追放された。アレクサンドロスが王位に即くや、直ちに呼びもどされたのは当然で、軍務に適さなかったので、財務に任じた。ただしアジア大遠征には大王の軍に従ったが、三三三年夏の頃、イッソスの戦に先立ってタウリスコスと呼ぶ男と共に職務を抛ちアジアから逃亡して、メガラに滞在した。大王はこの報に驚いて、更に大事な職を以て呼びもどした。はじめエクバタナに、後にはバビュローンにあって国庫の管理にあたった。[10] 大王のインド遠征中、当時多くの将軍やサトラップと同じく、大王の無事帰還はなかろうと考えて、官金を蕩尽し、生活の奢侈に耽った。ところがアレクサンドロスは、三二五年末カルマニアに、三二四年春スーサに現われ、謀反を企て或は職務怠慢の将軍やサトラップを厳しく罰した。ハルパロスは、宥恕はもはや叶わぬものと、国庫より五千タラントンを奪い去り、艦船三十に傭兵を六千率いて、アジアを逃げ、海路、アッティカのスーニオン沖に現われて、アテーナイへの入国を願った（Athen. XIII 595 E; Diod. XVII 108, 6; Curt. X 2,1）。時にアテーナイ人は大いに驚き、デーモステネースの動議により、その入国を拒絶して（Plut. Dem. 25; [Plut.] vitae X or. 846 A; Diod. XVII 108.7）、時のムニキア及び港の将軍フィロクレースをして直ちに港湾の守備につかせた（Dinarch. III, 1）。しかし、拒絶されたハルパロスは、タイナ

ロンへ兵を移して、今度は単身、二艘の船で再度アテーナイを訪づれた。この度はフィロクレースの妨げもなく、無事アテーナイに入国した（Deinarch. III, 1）。

二回にわたるハルパロスのアテーナイ来訪の時期に関しては、なお様々の見解がある。第一回来訪の時期は、サテュロス劇「アゲーン」（Athen. XIII 595 E-596 B）に基いて永しく推定せられて来たが重要な史料といえ、これによるだけでは、時期の確定はむづかしい。また今日、オーローポス碑文に基いて、第一回、第二回とも来訪の時期は推定されるが、しかもなお不明確な点があって、第一史料に基いての再吟味が必要である。

ハルパロスがアテーナイに来ると間もなく、その引渡しを要請するため小アジア・ギリシア間の海上監督、将軍フィロクセノス[11]から、使者が、アテーナイへと送られて来た。が、デーモステネースは、いまハルパロスを使者に引渡すのはわが国のためにならない、アレクサンドロスにわが国民は責めを残してはいけないからだ、最も安全なのは、ハルパロスを拘留し、その財産をアクロポリスに保管することである、ハルパロスの携えた財産を明日は早速調査するよう、と動議した（Hyper. c. Demosth. 8-9; Dein. I 89）。翌日デーモステネースは人をやって、財産を調べさせ、七百タラントンと報告した。ところがそれが、アクロポリスに齎らされたとき、半額三五〇タラントンにしかすぎなかったのにデーモステネースは、なに一つ言わなかった（Hyper. c. Dem. 9-11）。その後、ハルパロスは拘留を脱し、アテーナイを逃れてタイナロンへ行き、再び兵を率いて海に出たがクレタで、その部下ティブローンという者に殺された。

ハルパロスのアテーナイ滞在の期間については、直接言及した史料はなく、比較的長期間とするものと、一方短期間とするものがあって、未だ確定的な結論には至っていない。その決定には、第一史料に基きつつ、当時の歴史事情も考慮して、これを推定しなければならないのである。

ところで、アクロポリスに齎らされたハルパロスの財産が、公表額の半分になっていることが明るみに出て来ると、動議を出したデーモステネースに事態の責任が問われたばかりか、ついで、ハルパロスから賄賂を受けたとの嫌疑がかかった。[12] デーモステネースは己れの潔白を誓い、事の真

相を明らかにするようにと、アレオパゴスに調査を求めた。調査は進んだが、デーモステネース収賄の証拠はあがらなかった。アレオパゴスが、ハルパロスからの収賄者につきその名と収賄額とを公示したのは調査後漸く六ヶ月のことである（Deinarch. I, 45）。そこには、デーモステネース、デーマデース、アリストゲイトーン、フィロクレースなどの名前が連なっていた。公示後まもなく法廷が開かれて、デーモステネースは罰金刑、その支払いができなくて投獄されたが、やがて脱獄し、アレクサンドロスの訃報を聞くまで、トロイゼーン、アイギーナに過した。

三

さて、ハルパロスのアテーナイ来訪の時期は、デイナルコス[15]（III, 1）により、フィロクレースがムニキア及び港に配属の将軍だったときだと知られる。

フィロクレースの将軍在任の時期に関して、今日多くの研究者は、Mathieu の研究（Rev. de Phil. LV, 1929, 159 ff.）に従い、オーローポス碑文に基いて推定している。即ち、この碑文は、レオンティス部族のエフェーボイが、自分達の監督の任に当った人々に冠を授けたときのもので、フィロクレース（Φιλοκλῆς Φορμίωνος Ἐρετρίδης）はこの時、エフェーボイを監督する官職たるコスメーテース（κοσμητής. cf. Arist. Ἀθ. πολ. 42,2）として冠を受けている。

ところで、再びデイナルコス（III, 15）によれば、ムニキアの将軍フィロクレースは、ハルパロス事件に関連して、収賄の嫌疑によりエフェーボイを監督する任から解かれている（ἀπεχειροτόνησεν αὐτὸν ἀπὸ τῆς τῶν ἐφήβων ἐπιμελείας）。これら両つの事実から、二人のフィロクレース、即ち、デイナルコスの言及するムニキアの将軍とオーローポス碑文に見えるコスメーテースとが、実は同一人物だという仮定が成り立つ。その頃の事情も考慮し、両フィロクレースをかくて同一視する、すぐれた吟味を展開したのが Mathieu であった。その吟味に従えば、オーローポス碑文とは、前三二三年八月頃、レオンティス部族のエフェーボイが、自分達の指導に当った人達に任果てた後冠を授けたそのときのものとなる。而して、フィロクレースは三二五／四年度のムニキアの将軍で、且つは三二四／三年度のコスメーテースだったということになるのである。

すると、ハルパロスはフィロクレースがムニキアの将軍のときアテーナイに来たのであるから（Dein. III,1）、それは三二四／三年度の始るヘカトムバイオーンの初日、七月二十三日[14]（B. D. Meritt による）以前のこととなるであろう。

今日、この説は多数の支持を得、ハルパロスがアテーナイを訪問したの三二五／四年度のこととしている。[15] しかし、デイナルコスの言及するムニキアの将軍とオーロポス碑文にあるコスメーテースとが、同一人物だった確拠はどこにもないのだ。Gomme が異説を立てたように、[16] ムニキアの将軍フィロクレースは、その部族名も、父の名も知られていない。その上、当時はフィロクレースという名の、多くのトリエラルコスやアルコンなどがいたのである。

尤も、たとえ両フィロクレースを同一人物とする確証はないとしても、そう仮定するだけで、色々の歴史事象を更によく理解し得るとするならば、仮定自体が研究に重要な意義をもつといえるであろう。[17] ただ、だからといって、この仮定を歴史事実と同一視することは許されない。かかる仮定を用うることなく、第一史料から事実を推定し得るなら、更に望ましいこと云うまでもない。

従来永しく、問題の時期は、ヒュペレイデースの断章？ Demosth. col. 18-19 に基いて推論されて居た。今、オーロポス碑文はしばらく離れて、ここに最も信憑性に富む右の史料、ヒュペレイデースの断章の再吟味により、目ざす時期を検討してみたいと思う。

四

さて、Hyper. c. Demosth. col. 18 は、損傷の甚だしい断章で、今日まで種々補修が加えられている。[18] しかも、大凡次のことがこの断章から知られるのである。(イ)ハルパロスのギリシア来訪は突然で、誰れもそれを予知し得なかったこと。(ロ)ハルパロスがギリシアへ来たとき、アレクサンドロスから発せられた亡命者に関する布告をニカノールが齎らして、ギリシア全土がそのため擾乱に陥っていたこと。

この第二点が、ハルパロスのアテーナイ来訪の時期決定に従来、重要な史料として用いられてきた。即ち、ディオドーロス（Diod. XVIII, 8. 2-7）は、これに関し、次のように伝えている。即ちすべての亡命者をギリシア諸都市に帰

還させようと決心したアレクサンドロスは、三二四年のこと、アリストテレースの婿スタギーラのニカノールに、[19]来たるオリュムピア祭において大衆を前に伝令を通じて朗読させる亡命者宛の手紙を手渡し、ギリシアへと派遣した。手紙が伝令によって朗読されると、大衆は歓喜し、王の処置を誉め称えた。ときに、オリュムピアに集まった亡命者の数は実に二万を越えたというが、手紙によれば、ギリシア諸都市は、殺人及び不敬罪の者を除いて亡命者を悉く各々自国に受入れるべきことを命じてあったからである。亡命者召還に関するこの布告は、だから亡命者の喜ぶところであっても、ギリシア諸都市、とりわけアイトーリアー人及びアテーナイ人にとっては、全く好ましからぬものであった。というのは、アイトーリアー人はアカルナーニアーのオイニアダイを攻略し（三三〇年頃）、市を占拠して住民を追払っていたし、アテーナイ人も、長期にわたり（三六五年、三六二／一年、三二六／五年）サモスを攻略して、住民を追出しクレールーコイを移民させていた。[20]王の布告が実施されれば、奪い取ったこれらのものを、返済しなければならなくなるのだ。ヒュペレイデースの言及するように、ニカノールが齎らしたこの布告が、ギリシア諸都市を擾乱に導いたのはこのためであった。而してハルパロスがギリシアへ来たのはこの時期なのである。また、オリュムピア祭には、使節代表（ἀγεθεωρός）としてデーモステネースがオリュムピアへと赴いていた（Dein. I 81–82）。

次に、Hyper. c. Demosth. col. 19 においてヒュペレイデースは、デーモステネースを攻撃して、次のように述べている。「そのことをお前は動議によって仕組み、ハルパロスを拘留して、他に何らの避難所をもたないすべてのギリシア人が、アレクサンドロスのもとへ使節を送るようにした。また、金銭と軍隊とをもっているサトラップたちが、喜んで吾々の軍勢に組しようとしていたのに、ハルパロスの拘留により、総体に、アレクサンドロスへの背叛を妨げたばかりでなく、むしろ……」[21]と。

ところで、ギリシアからの使節は、アレクサンドロスがバビュロンにあるとき（三二三年春）到着しているので（Arr. VII 23, 2; 14, 6）、彼らはギリシアを三二四年暮の頃出発したことになる。すると、デーモステネースが、アレクサンドロスへの使節を送るよう動議したのは、彼がオリムピア

から帰国して後と考えることができよう。また、右の断章によれば当時アテーナイにおいては、ハルパロスと組みしアレクサンドロスと一戦を交えようとする一派のあったことが知られるのである。

このヒュペレイデースの両断章（c. Dem. col. 18-19）に基いて、Duhn（Neue Jahrb., 1875, 33 ff.）の推論は次の如くであった。

即ち彼は、ハルパロスの第一回アテーナイ訪問については、Droysen の説に従い、サテュロス劇「アゲーン」から、三二四年初頭であるとしたが、Hyper. c. Demosth. col. 18 において言及されるところは、ハルパロスの第二回来訪に関するものと仮定して、ハルパロスはオリュムピア祭以後、亡命者に関する布告がニカノールを通じて公布せられ、ためにギリシア諸都市が擾乱に陥っていた時に、第二回のアテーナイ訪問を試みたとした。即ち、ハルパロスは、スーニオン沖でアテーナイ入国を拒絶され、一時兵をタイナロンへ移し、そこで好機を待っていたが、亡命者に関する布告がオリュムピア祭において公布され、ギリシアに反アレクサンドロスの気運が生じた。この時こそ謀叛の計画には絶好の機会なりとして第二回のアテーナイ訪問を試みたのだ。この好機を除いては、一旦入国を拒絶されたハルパロスが、無事アテーナイに入り得た時期は考えられない、というのが Duhn の推測であり。以来、多くの人達が追随した（Droysen, Gesch. des Hell. I², 278; Holm, Griech. Gesch. III, 416; Bauer, 13 f.）。

だが、右の説には、二三疑問とすべき点がある。(a) Hyper. c. Demosth. col. 18 によれば、ハルパロスのギリシアへの来訪は突然で「誰れも予知できなかった」とあるから、この断章で言及するのは、Duhn の仮定したようにハルパロスの第二回来訪についてではなく、第一回来訪についてでなければならない。(b) また、武装してのハルパロスの最初の来訪は、アテーナイ人には、あたかも港を攻撃されるかの恐怖を抱かせたのであるが、[22] 第二回目には嘆願者として（ἱκέτης, Diod. XVII 108,7）単身入国したのであるし、その上、ハルパロスは、飢饉の際（三三〇—三二六年）[23] アテーナイに穀物をおくって、アテーナイの市民権を貰っていたので（Athen. XIII 596 AB; Diod. ibid.）、その入国を阻む理由を見出すのは困難であったであろう。[24] (c) また、

スーニオン沖で入国を拒絶され、兵をタイナロンへ移したハルパロスは、そこに数箇月、好機を待って滞在した、とDuhnは仮定しているが、当時、アレクサンドロスは汎ギリシア同盟のヘーゲモーン（ἡγεμών）として君臨し、その代任者として「ヨーロッパの将軍」（στρατηγὸς τῆς Εὐρώπης）アンティパトロス[25]がギリシアの支配に任じていたから、王に対する叛逆者ハルパロスが、多数の兵、多額の財をもって、数箇月の長期間、アジアにせよギリシアにせよ、安穏に過せる処はなかったとせねばならない。[26]事実、ハルパロスのアテーナイ入国と殆んど時を同じくして、フィロクセノスからの引渡しの要請があり、また、アンティパトロス及びオリュムピアスからも同様の要請があったといわれる（Diod. XVII 108,7; [Plut.], 846 B）。

以上(a)(b)(c)の疑問を解消するには、ハルパロスの第一回、第二回のアテーナイ訪問は、短期間に続けて行われたとし（これは可能でもあり、至当である。後述）、両来訪共に、オリュムピア祭以後に行われたものと仮定することができよう。この際、フィロクレースのムニキア将軍職は三二四／三年度であったとしなければならないが。Adams（124 ff.）は新解釈でそれを補い、[27]ハルパロスの両アテーナイ訪問をオリュムピア祭以後に比定したがこの説は永いこと支持された（Körte, 218 ff.; Beloch, IV, 1², 58; Berve. II, 78 A 2）。

*

ハルパロスの第一回及び第二回アテーナイ来訪の期間については、どの史料も明確には言及しない。それ故、近代の研究者もあるものはこの期間に特に注意しなかったし（Sauppe, 650; Schaefer, III, 279 f.; Grote, XII, 297）、あるものはかなりの長期を仮定し（Duhn, 41 A 11; Droysen I, 278 f.; Colin, REGr. 1925, 515 ff.; Hypéride, 1946, 236 Treves, REA, 1934, 515 ff.）、またあるものは短期間とした（Bauer, 12; Adams, 131; Badian, JHSt., 1961, 43）。しかし、次の理由により、ハルパロスの両来訪は、短期間に続けて行われたものと考えるのが至当であろう。

(a) どの史料もハルパロスの両来訪の期間に特別な考慮をはらっていない。クルティウス（X 2, 1）は断章的な部分で不明確だし、プルータルコス（Dem. 25; Phoc. 21）は両来訪に何らの区別もつけていない。また、ヒュペレイデ

ース（c. Dem. 8; 18）もディナルコス（I; III）もなんら言及していない。ディオドーロス（XVII 108, 6-7）も「十弁論家の生涯」の著者（Vitae X or. 846 A）も明言しない。しかし、このうち後二者の短い記述は、あたかも両来訪が短期間に続けて行われた如き印象を人にあたえる（cf. Baucr, 12）。これは消極的な理由である。因に、史料の不足するとき、事象の理解は、歴史的考察により補われなければならない。(b) そこでハルパロスの両来訪が短期間に続けて行われたということは、論の進むにつれ、その諸理由が更に明らかとなって来るが、ここでは既に触れた理由、マケドニア支配下のギリシアにおいて、叛逆者ハルパロスが、多数の兵、多額の財をもって、長期間安穏に留まることは不可能だった、ということを挙げるに止める。

五

さて、Adams は、Duhn の説を受継ぎ発展させて、同じく Hyper. c. Demosth. col. 18-19 にもとづきながら、ハルパロスの両アテーナイ来訪は、オリュムピア祭以後、亡命者に関する布告によりギリシア諸都市が擾乱しているときなされたとした。しかし、このように仮定するとき、またもや、理解に困難な二つの事実が生じて来る。

(a) 一つは、既に Holleck, 5 f. によって指摘せられたものであるが、もしオリュムピア祭以前に、亡命者に関する布告の内容が、何らかの仕方で、ギリシア諸都市に伝えられていなかったとすれば、二万に余る多数の亡命者が布告を聞くため、果してオリムピアに集まったか、という疑問である。即ち、ニカノールはオリュムピア祭以前にギリシアに到着し、布告の内容はその時に既に知りわたってギリシア諸都市の擾乱はオリュムピア祭以前に生じたと見る。

(b) これを証するのは、また、次の事実である。デイナルコス（I, 81-82）によれば、デーモステネースはオリュムピア祭の「使節代表という名目で、ニカノールに会うため」オリュムピアに赴いたという。しかも、その任務を自ら進んで申し出たという（cf. Dein. I, 82: *ἀρχεθεωρὸν αὐτὸν ἐπεδώκατε τῇ βουλῇ*）。そこに何らか政治的意図のあったことが察せられよう。それについては言及した史料は何もないが、近代の研究の示すように、[28] 次のようなことが推測される。即ちデーモステネースは、ニカノールに会い、この男を通じ、亡

命者に関する布告の実旋を延期してもらえるよう、王に請願しようとしたものであろうし。同時に、諸都市からの使節と会い、ギリシア当面の問題について協議しようとしたのでもあろう。この解釈は布告の内容が、オリュムピア祭以前に既に知られていたということを前提したものであるが、かつてはこのことが等閑に附せられていた。抑々デーモステネースがニカノールに会うためにオリュムピアに赴いたという一事からしても、この解釈は至当であると思われるのに。デイナルコスの弁論によっても、アテーナイはそのとき何らかの政治的難局に直面していたことが窺われる（cf. Dein. I, 81: *εἴτιν γε τούτῳ*〔=Δημοσθένει〕 *παρασιταταθέσθαι τὴν πόλιν καὶ ἐπιτρέψαι πανδημεὶ μέλλοντας*）。この政治的難局は、当時の情勢に鑑みて、ヒュペレイデースの言及するニカノールの到来で生じたギリシア諸都市の擾乱と同一の事態を指す以外、他の如何なる事態を想起することができるであろうか。

結局、布告が生んだあの擾乱は、ニカノールの到着と共に、オリュムピア祭以前に生じたと考えるほかないであろう。Duhn、Adams 等の意見の如く、オリュムピア祭において大衆の面前で王の手紙が読まれて後にはじめて生じたものではあるまい。ところがそれの証拠となるのが、実は、Duhn Adams 等の用いた断章、ほかならぬ Hyper. c. Demost. col. 18 なのである。

六

Hyper. c. Demosth. col. 18 によれば、ギリシア諸都市に生じた擾乱は「ニカノールの到来とアレクサンドロスのもとより齎らされた亡命者（及びアカーイアー人、アルカディアー人の *πανοὶ σύλλογοι*）[29]に関する *ἐπίταγμα* によって」であるという。さて、*ἐπίταγμα* とは如何なるものか。このことを理解するため、亡命者に関する布告が、一体どのように発布され、どのようにギリシア諸都市に伝えられたかを、今日の研究に沿いながら、[30]先ず想起してみよう。

亡命者に関する布告は、前三二四年春（二月以降）、[31]アレクサンドロスがスーサにおいて、その軍陣で（*ἐν τῷ στρατοπέδῳ*, SIG,³ 312）発布したものである。[32]この布告（*διάγραμμα*）にもとづいて、ギリシア諸都市は夫々処置をとらねばならなかった。即ち、王の *διάγραμμα* は、ギリシア諸都市に

対して法的効力はもたなかったが、その実施は促すものであった。[33] 王はスーサにおいて *ἐπίταγμα*を発して後、亡命者宛の手紙（*ἐπιστολή*, Diod. XVIII, 8, 3）をオリュムピア祭において朗読させるため、ニカノールをオリュムピアへと派遣した。同時に、*διάγραμμα* の写しと並びに布告の実施に際しての訓令とを「ヨーロッパの将軍」アンティパトロスに送ったのである（cf. Diod. XVIII 8, 4）。ニカノールが到着すると、*διάγραμμα* の内容が *ἐπίταγμα* という方式でギリシア諸都市に伝えられた。Wilcken (Sitzb. Berlin, 1922, 116 f.) は *ἐπίταγμα* を *διάγραμμα* の写しと見る。

ギリシア諸都市の擾乱は、かくてオリュムピア祭で朗読の王の *ἐπιστολή* によってではなく、正にニカノールの齎らした *ἐπίταγμα* によって生じたのである。従来、*ἐπιστολή* と *ἐπίταγμα* という両者の区別が、クロノロギーの分野において考慮されなかっただけなのであるが。

*

さて、ニカノールは、アレクサンドロスがスーサにおいて亡命者に関する布告を発布して後、ギリシアに派遣されたのであったから、三二四年二月以降、スーサを出発したことになる。ところで、ニカノールは急使ではなく普通の使節だったと考えられるから、スーサからサルディスに至るまでに三箇月を要しただろう。というのは、当時の旅行の速度は、ヘーロドトス時代のそれと大差はなかったからである。[34] するとそこから更にギリシアまでの旅程を概算するなら、ニカノールは、六月初旬以前にはギリシアへ到着した筈がなかろう。[35] 恐らくは、六月中旬と考えてよい。蓋しハルパロスのアテーナイ来訪は、それ以後のことなのである。

七

このほか、クロノロギーに大きな役割を果すものに、ティモクレースの喜劇「デーロス」（または、「デーリオス」）の断章（Athen. VIII 341 E-342 A）がある。劇中、デーモステネース、ヒュペレイデースをはじめ、五人の反マケドニア派の名前が挙げられ、いづれも、ハルパロスから収賄したと囃されている。

上演の時期は不明であるが、この五人のうち、ひとりデ

ーモステネースのみが後で起訴をうけているから、その時期は、アレオパゴスによる例の収賄者名の公示以前のことであろう。従来、劇は三二四年春（Girard, 265; Colin, REGr., 1925, 323; Hypéride, 236）、あるいは三二三年春の（Adams, 131; Körte, 225; Badian, 42）レーナイア乃至大ディオニュシアが上演の時期として考えられた。ところが、三二四年六月中旬後のハルパロスの第一回訪問は突然で何人も予知しなかった（Hyper. c. Dem. 18）というのであるから、この男から収賄したという黒い噂は、その訪問後に生じたとせねばならない。即ち、「デーロス」上演の時期としては、三二三年のレーナイア（一月廿八日頃演開。Meritt による）か、あるいは同年の大ディオニュシア（三月廿五日頃開演）[36]以外には考えることができない。

また、アレオパゴスが収賄者の名を公示したのは、調査後六箇月後であったという（Dein. I 45）。この表現が誇張であり（Duhn, 57 A 30）それが五箇月あるいは五箇月半であったとしても、「デーロス」が三二三年春に上演されたものとすれば、三二四年七月末より以前には、この調査の始められた筈はない。その七月末に丁度デーモステネースはオリュムピア旅行の途上にいたから、の調査は、デーモステネースの帰国して後、即ち八月中葉以降[37]にこそ、始められたとせねばなるまい。調査を要請したものはほかならぬデーモステネースだからである。

デーモステネースの帰国の後、調査が始まったとするならば、アクロポリスに齎らされたハルパロスの財産が、実は公表額の半分でしかなかったことの判明したのも正にこの頃だったといえるであろう。また、それに前後して、ハルパロスがアテーナイから風を喰って逃亡したということも。少くとも、ハルパロス逃亡の際、デーモステネースがアテーナイにいたことは次の通り推測される、即ちヒュペレイデースは、ハルパロス逃亡の責任をデーモステネースに帰しているが（c. Demosth., 12）、若しもデーモステネースにアリバイが成り立ち得るなら——アテーナイにいなかったなら——老練なヒュペレイデースともあろうものが、まさか下手に追及はしなかったろうと思われるからである。[38]

八

終りに、アテーナイオス（Athen. XIII 595 E-596 B; 586 D）伝うるところのサテュロス劇「アゲーン」の断章につき一言したい。これはハルパロスの第一回アテーナイ来訪の時期を決定するに永しく、用いられたものである。

この劇は、カタネーのピュトーン[39]の作とも、また、アレクサンドロスの自作ともいわれているがハルパロスのアジア逃亡の後、ディオニュシアがヒュダスペス河畔で挙行された折、上演されたとアテーナイオス（595 E）は伝えている。従来、この断章の内容より、「アゲーン」の上演は、ハルパロスの逃亡後その逃亡がアレクサンドロスの陣営では既に知られてはいたものの、第一回アテーナイ来訪の際その入国が拒絶されたということは未だ知られていない時のことであったと推測されて来た。[40]そして、その第一回アテーナイ来訪の時期に関しては、次の三つの意見がある。

(1) まず、第一の意見では「アゲーン」は、三二六年秋、インドのヒュダスペス河畔で（その頃アレクサンドロスはヒュパシスからの帰路ここを通過した）上演されたと考え、三二六年秋以前に、ハルパロスはバビュローンの国庫の財を盗み出し、キリキアーに身を潜めて、三二四年春、そこより兵を率き連れてギリシアへ逃げ出したものとする（B. Niese, Gesch. der griech. und maked. Staaten I, Gotha 1893, 155 f.; 175; 156 A 1）。

けれども、三二六年秋、未だ戦陣を馳駆していたアレクサンドロスに、劇を催す余暇などあろう筈もなかったろうし、少くともハルパロスは、当時アジアから逃亡する何らの理由ももちあわさなかった。[41]

(2) 次に、アテーナイオスの伝える「ヒュダスペス河畔」（ἐπὶ τοῦ Ὑδάσπου ποταμοῦ）というのは、スーサ近郊を流れている「コアスペス河畔」（ἐπὶ τοῦ Χοάσπου ποταμοῦ）の聞き違いか、あるいは伝承の誤りで、「アゲーン」は三二四年春、ディオニュシアにおいて、スーサで上演されたとする意見。これは Droysen 及び Grote 以来の説である。これによると、ハルパロスは三二五年末あるいは三二四年初頭アジアから逃亡し、三二四年春、アテーナイを訪れたとする。この説は研究者の多くによって永しく継受されてきた（Droysen I, 244 A 1; Alex. 498; Grote, XII, 240 n.

3; Sauppe, 650; Schaefer III, 279; Holleck, 3; Stählin, RE VII, 1912, 2398; Colin, REGr. 1925, 318; Mathieu, 168)。

だが、三二四年春スーサにおいて、アレクサンドロス以下数多のマケドニア将兵が、ペルシア婦人と華燭の典を催したという伝承は数々あるが（Arr. VII 4,4; Diod. XVII 107, 6; Plut. Alex. 70; Just. XII 10, 9 f.）、どの史料にも芝居には言及がない。また、ハルパロスは、ニカノールのギリシア到着後生じた擾乱の後、アテーナイを来訪したものであるが、その来訪はアテーナイ人にとり突然で、何人もこれを予知できなかったというのであるから、ハルパロス、アジア逃亡の意外の報せは、その頃未だニカノールの耳にも入らず、ましてやアテーナイ人の耳にも入らなかったといえるであろう。蓋し三二四年春、ニカノールがスーサを発つ前、ハルパロス逃亡の醜聞は、まだアレクサンドロス陣営にはなかったのである。

(3) さて、「アゲーン」の上演がインドのヒュダスペス河畔でもなく、さりとてスーサのコアスペス河畔でもないとすれば、一体どこであったであろう。当時の情勢から考えて最も符合する説は、Adams (128 ff.) 及び Beloch (IV, 2, 434 ff.) のそれである。即ち、「アゲーン」は三二四年秋、ディオニューソスの祭のとき（*θεομοφόρια*: 初日は *Πυανεψιών*、十日即ち、十月二十八日がその初日。Meritt による）エクバタナにおいて上演せられたとする。事実、エクバタナではその頃、盛大な饗宴が催され祝祭が行われて芝居も挙行せられた、と史料は伝えているのである（Ephippos ap. Athen. XII 538 A; Arr. VII 14, 1; Diod. XVII 110, 7; Plut. Alex. 72)。また一方エクバタナの、アレクサンドロス陣営では、当時アテーナイに対する憤怒の情が漲って、その有様は、ゴルゴスの乾杯の辞（Athen. XII 53 8B）の中に於けると同様、「アゲーン」の台詞（Athen. XIII 596 B）に如実に見られる通りなのだ。ところが同年春スーサにおいては、この様な情勢は未だなかった。すると、「アゲーン」がヒュダスペス河畔で上演されたとアテーナイオスが伝えるところは、インドのヒュダスペスでも、スーサのコアスペスでもなく、実はウェルギリウスの詩（Georg. IV 211）が伝えるところの、メディアにあるてうヒュダスペス河がそれであろうと考えられる。この説は今日、多くの人に支持されている（Körte, 221 A 1; Berve II, 339; Treves REA

36, 518 ; Glotz-Cohen IV, 1², 221 ; Colin, Hypéride, 233)。ただ、にも拘らず、従来等閑視されていた吟味の二三を、以下展開してみることにする。

従来永しく「アゲーン」の断章より前述の如く、次のような推測がなされていた。つまり、「アゲーン」上演のとき、ハルパロスのアジア逃亡は既にアレクサンドロス陣営では周知であったが、第一回アテーナイ来訪の際その入国が拒絶されたのはまだ知られていなかった、と。しかし、入国拒絶のことが未知だったとは「アゲーン」の断章からでは確証できない。[42] むしろ、入国拒絶のことはもとより遂に入国したことすらも既に知られていたと見る方が妥当である。というのも、「アゲーン」の断章より、当時アレクサンドロス陣営では、アテーナイ攻撃をも辞さずとの情勢があったのを窺えるからである。とりわけ、次の疑問がとけない。ハルパロスのアテーナイ入国が「アゲーン」上演の際、もしも知られていなかったとするならば、ハルパロスは遅くとも七月中葉（デーモステネースのオリェムピアへの出発）以前にはアテーナイに入国していたわけなのに、十月の末になっても、エクバタナにはその情報が伝えられなかったことになろう。だがこの重大な情報が、三箇月余り、四箇月にも近い間、アレクサンドロスに達しなかったというは、餘程の事情でもない限り決して考えられないことがらである。[43]

ところで、ハルパロスのアテーナイ逃亡に関しては、「アゲーン」上演の際、アレクサンドロス陣営にはたしかに知られていなかった。ハルパロスのアテーナイに入国の報が伝はって以来、四箇月近くもしてなお、その逃亡の情報は伝えられていなかったということは、彼が比較的長期間アテーナイに滞在したことを暗示している。ハルパロスがアテーナイを逃亡し、クレタで殺されたという報が、アレクサンドロスのもとに伝えられたのは「アゲーン」上演の後まもなく、のことであろう。このことはクルティウス（X 2, 3–4）の記述よりも間接に推測し得るところである。

九

以上の吟味に基き、私は、ハルパロス事件に関し、次のようなクロノロギーを設定したい。

アレクサンドロスはインド遠征よりカルマニアー、スー

サに帰り、多くの将車やサトラップを厳罰に処していった。そのため、将車やサトラップの間には恐怖の念が漲っていた。[44] 彼らはアレクサンドロスの政策をよく理解し得ず、大王に反感を抱くものさへ多かった。

その頃、三二四年春、ハルパロスも国庫の財を持ち出して、アジアを逃亡せんと企てていた。彼はアテーナイから呼寄せた遊女グリュケラのために、キリキアーのタルソスに宮殿を構えていたが、このタルソスは、グリュケラとの奢侈なくらしのためだけの土地ではなくて、当時の重要な造幣都市であったから、[45] 彼のまた職務遂行の地でもあったといえる。これがそのアジア逃亡を暗々裏に行わしめた根拠といえよう。もしタルソスがその職務遂行の場処でなければ、バビュローンから国庫の財を運び出し、バビュローンを不在にしなければならぬから逃亡の計画も逸早く暴露されていたであろう。

また、タルソス近郊で、ハルパロスが六千の傭兵を集めることは、当時むづかしい業ではなかった。アジア海岸には、当時、職を失い略奪しながら、帰国の機を求めてさまよい歩く夥しいギリシア人傭兵がいた。[46] つまり、アレクサンドロスは、三二四年はじめ、アジアのサトラップや将車のもとにいる傭兵を直ちに悉く解雇するように命じたからである（Diod. XVII 106, 3; 111, 1; XVIII 9, 1）。それら傭兵のうち五万をアテーナイ人レオーステネースが（Paus. I 25, 5; VIII 52, 5）、六千をハルパロスが、ラコーニケーのタイナロンへと連れもどしたのであった。

これら傭兵は大部分、ギリシア諸都市からの亡命者であった。それ故、亡命者に関するアレクサンドロスの布告は、実はアジアにおける傭兵問題解消のための政策の一つなのであった。当時亡命者の頭数はしかとは解りかねるけれども、オリュムピアに集まった二万という人数は、アテーナイ当時の成年男子の総数にも匹敵して、[47] いかに亡命者問題が当時の重大な社会及び政治問題だったかが窺い知られる。

亡命者に関する布告は、三二四年春スーサに発布となって、亡命者宛の勅書を携えニカノールはギリシアの地へ来た。到着は六月中葉と見てよいであろう。同月下旬には、ギリシア諸都市に布告（διάγραμμα）の内容が ἐπίταγμα なる方式で伝えられ、ためにギリシア諸都市は擾乱に陥っていた。デーモステネースは、ギリシア当面の問題を解消す

るため、オリュムピア祭の使節代表としてオリュムピアに赴くことを、自らブーレーに申し出たが、この頃アレクサンドロスを神と崇めよとの要請があって、デーモステネースは祖先伝来の神々を崇めるべしと、その要請に反対していたわけである。[48]

七月のはじめ、ハルパロスは三〇の艦船を連らねアッティカのスーニオン沖に姿を現わした。それは突然で誰れ一人予知しなかった。アテーナイ人は驚き、港を攻撃されはしないかと恐怖を抱いて、フィロクレースをして港湾の守備にあたらせた。しかし、そこでデーモステネースの動議によりアテーナイ入国を拒絶されると、ハルパロスは直ちに兵をタイナロンへと移した上、引続き、二艘の船で単身アテーナイに入国した。それは七月の第二週目はじめの頃のことであろう。この第二回訪問に際しては、彼は嘆願者として赴いたので、それに市民権をもっていたから、誰れも入国を阻止し得なかったことであろう。しかし、もしアテーナイをはじめギリシア諸都市に、ニカノールの到着以来高まりつつあった反アレクサンドロスの気運がなければ、ハルパロスが再度アテーナイ来訪を試みたかどうかは疑問といえる。

折しもアテーナイは、ハルパロスと結び、反アレクサンドロスの一戦を挑もうとするヒュペレイデースをはじめ主戦派が抬頭せんとしていたときであったが、一方、デーモステネースは、三三五年テーバイの壊滅後アレクサンドロスにより他の七人の弁論家と共に引渡しを要請されて以来、これまでの戦闘的な反マケドニア政策をかなぐり捨てて、今や穏健にして、現実的な政策をとるにいたっていた。これが、永年の同志たち反マケドニア派の人達に疑いを抱かせる素因ともなり、デーモステネースはその人々と相疎隔する関係となっていたのだ。所謂ハルパロス裁判が惹起される結果となったのもそのためである。

ハルパロスの入国と殆んど時を同じくしてフィロクセノスからの使者が、ハルパロス引渡しを要請して到着した。これはデーモステネースがよりによってオリュムピアへ旅立とうとしていた時なのである。七月の第二週の終り頃と見てよいであろう。それ故、デーモステネースの動議によりハルパロスは拘留され、その財産はアクロポリスに齎らされたが、その額が報告額の半分であることを、デーモス

テネースは公表しなかったのである。それはハルパロスからの賄賂のためであるというより、彼の立場がそうさせたといえるであろう。何故ならいまギリシア当面の問題を解消せんとするためにオリュムピアへと赴く彼にとっては、事実の解明から生ずる混乱を特に恐れなければならぬ理由があったのだから。あるいは、事態の変化によっては、彼もまた、ハルパロスを利用せんとしていたのかもわからない、いずれにせよそのオリュムピア旅行には、大きな期待がアテーナイ人からよせられていた。それがまた、ハルパロスをして、この弁論家の帰国までアテーナイに踏み留まらせたともいえるであろ。

ハルパロスの引渡しを拒絶し、その財産をアクロポリスに保管するよう動議したデーモステネースの政策は、正に当を得たものであった。フィロクセノスに続いてアンティパトロス、オリュムピアスからも引渡しの要請交々いたったときも、何らの問題を惹起さなかったということは、この当を得た策がものをいったからといえよう。而も事実上、ハルパロスが比較的長期間アテーナイに滞在し得たのも一にこの策の故といえよう。

デーモステネースは、七月の第四週のはじめ頃、アテーナイを発ってオリュムピアへと旅立った。この頃、三二五／四年度は終り、七月二十三日、三二四／三年度が始まった。ムニキアの将軍フィロクレースはコスメーテースとなった（オーロポス碑文による）。当時はまたフィロクレースをめぐり何らの醜聞も立っていなかったのだ。デーモステネースは八月中旬に帰国した。しかし、アテーナイ人の切に期待したところをば、オリュムピアから結局は持ち帰り得なかったのである。ハルパロスはまもなく拘留を脱して逃亡した。そして、アクロポリスに保管しているその財産が、デーモステネースの報告額の半分にすぎぬことがやがて明るみに出されるのである。

これ以後の経過については、稿を改めて吟味したい。というのは、そのためには他の諸方面即ち、当時のマケドニアのギリシア支配、アテーナイの政界、それにレオーステネース等の活躍などについても、あらためて吟味を加えねばならぬからである。因みに、以後、デーモステネースの政界における影響力は徐々に衰え（これはマケドニアのギリシア支配の変遷に深い関連ありと見える）、これに反して反マ

ケドニア派の急進的な勢力が急速に増大するが、所謂ハルパロス裁判は遂に彼等の勝訴となって、デーモステネースの国外逃亡におわったのである。三二三年六月十三日、アレクサンドロス大王はバビュローンに夭逝した。訃報がアテーナイに伝わるや、レオーステネースを指揮者として忽ち反マケドニアの軍勢が糾合された。所謂ラミア戦争がこれとなるのである。この戦争の際、アクロポリスに保管されていたハルパロスの金が使用されたという（Diod. XVIII 9,1 ff.）。

① 第一史料には、Hypereides, c. Demosthenes: Deinarchos, I (c. Demosth.); II (c. Aristogeiton); III (c. Philokles) の所謂ハルパロロス裁判においてなされた四弁論がある。デーモステネースなどの被告者の弁論は残されていない。ヒュペレイデースのものは、最も信頼性のある史料であるが、一八四七年、エジプトにおいて、パピュロスの中に発見されたもので、非常に傷んだ断章である。この断章が世に出るまでの経過については、Sauppe, philol. III, 1848, 410 f. 参照。また、デイナルコスの三弁論は、c. Demosth. を除いて、たゞ部分が残っているに過ぎない。そして、デイナルコスの弁論は、従来しばしば、その真偽性が問題とされた。しかし、偽作とする積極的な証拠は見出せない。その真偽性に関しては、Adams, TAPhAss. 32, 1901, 122 f. 更に L. Schmidt, Rh Mus. XV, 1860, 212 ff.; Duhn, Neue Jahrb. 111, 1875, 52 f. 参照。

クロノロギーにおいて、これを補うものとして、アテーナイオスの伝えるサテュロス劇「アゲーン」（Athen. XIII 595 E-596 B; 586 D）及び喜劇「デーロス」（VIII 341 E-342 A）の断章がある。また、近年、オーロポスの碑文も重要な史料となっている。これは、はじめ Leonardos, *Ἀρχαιολογικὴ Ἐφημερίς*, 1918, 73-100 に、後更に、Ch. Michel, Recueil d' inscriptions grecques, Suppl. II no 1704 及び P. Roussel, BCH LIV, 1930, 280 f. に再録されている。

第二史料としては、Arr. Anab. III, 6, 4 ff.; 19, 7; Diod. XVII 108, 4 ff.; Curt. Ruf. X 2, 1-3; Plut. Alex. 41; Dem. 25-26; Poc. 21-22; [Plut.] vitae X or. 846 A ff.; Justin. XIII 5, 9; Paus. I 37, 5; II 33, 4 が挙げられる。これら第一及び第二の史料批判に関しては、Adams, a. a. O. 参照。

② ハルパロス裁判におけるデーモステネースの有罪無罪に関する、古代の人々の見解については E. Drerup, Demosthenes im Urteile des Altertums, Würzburg 1923 参照。

③ H. Sauppe, Die neuen bruchstücke des Hyperides, Philologus III, 1848, 610-658;
F. von Duhn, Zur Geschichte des Harpalischen Processes, Neue Jahrb. für Philol. und Pädag. 111, Leipzig 1875, 33-59;
H. Hollerk, Der harpalische Prozess des Demosthenes, Beuthen O.-S. 1892;
K. J. Bauer, Demosthenes und der Harpalische Prozess,

ein Beitrag zur Lösung der Harpalosfrage, Diss. Freiburg i. Br. 1900;

J. G. Droysen, Geschichte des Hellenismus I, Hamburg 1836[1]; Gotha 1877[2];

G. Grote, History of Greece XII, 1856;

A. Schaefer, Demosthenes und seine Zeit III, Leipzig 1858[1], 1887[2].

ヒュペライデースの「反デーモステネース論」の断片発見以前の文献は、Droysen のものを除いて、もはや役立たない。

④ A. von Körte, Der Harpalische Prozess, Neue Jahrb. 53, 1924, 217–231; H. Berve, Das Alexanderreich auf Prosopographischer Grundlage, München 1926, II Nr. 143 ″Αρπαλος;

G. Colin, Démosthène et l' affaire d'Harpale, REGr. XXXVIII, 1925, 306–349; XXXIX, 1926, 31–89;

Le discours d' Hypéride contre Démosthène sur l'argent d' Harpale, Ann. de l' Est, Mém. no 4, Paris 1934;

Hypéride Discours, Paris 1946.

因に、フランス語で、はじめてこの問題を論じたものは J. Girard, Démosthène dans l'affaire d' Harpale, Etudes sur l'éloquence Attique, Paris 1874, 235–305.

⑤ G. Mathieu, Notes sur Athènes à la veille de la Guerre Lamiaque, Rev. de Phil. LV, 1929, 159–183.

その後、オーロースス碑文のクロノロギーに関しては P. Treves, Notes sur la chronologie de l'affaire d' Harpale, REA 36, 1934, 513–520; RE XIX, 1938, Sp. 2489 ff. s. v. Philokles Nr. 4.

⑥ R. Sealey, The Olympic Festival of 324 B. C. Cl Rev. 1960, 185–186 参照。オリュムピア祭の最盛日を八月四日とすれば、その競技会は、七月三十一日から八月四日までか、あるいは、八月一日から六日まで挙行せられたことになる (L. Ziehn, RE XVIII, 1 (1939) 10 ff. 参照)。因に、オリュムピア及びオリュムピア祭については最近の研究を欠いている (Bengtson, Griech. Gesch.[2] 1960, 85 A 2)。

⑦ E. Badian, Harpalus, JHSt LXXXI, 1961, 16–43; The First Flight of Harpalus, Hist. IX, 1960, 245 f.; The Death of Parmenio, TAPhAss. XCI, 1960, 324–338.

⑧ この小論は、一九六〇年十一月、アレクサンダー・フォン・フムボルト財団の奨学生として西ドイツに留学し、ヴュルツブルク大学において、ドクター・ハルマン・マントゾン教授の御指導のもとに研究を進めてきた「ハルパロス」についての研究成果の一部である。

⑨ クロノロギーに関係のない諸事項に関しては、出典を明記しない。その出典に関しては、Berve, Alexanderreich II, 75 ff. 参照のこと。

⑩ ハルパロスの職務に関しては、F. Schachermeyr, Alex. d. Gr., 1949, 239, 417, 441; H. Berve, Griech. Gesch. II, 1952, 197 f.; W. W. Tarn, Alex. the Gr. I, 1948, 56, 128 f.; CAH. VI, 1953, 385, 465 f.; G. Kleiner, Alexanders Reichsmünzen, Akademieverlag Berlin, 1949, 29 ff. 参照。ハル

ペロスは唯に国庫の管理に当った (Diod. XVII 108, 4; Arr. III 19, 7) ばかりでなく、増援軍の補給から (Curt. IX 3, 21) 王の記録の世話に至るまで (Plut. Alex. 8) 傭兵の募集、造幣にも従事し、彼はサトラップに命令する権限をも持っていた。即ち、彼の後任者アンティメネース (Ps. Arist. Oecon. II 34, 38) 以上の力をもっていた。

⑪ アイロクセノスの職務については、Tarn, Alex. II, 171 ff.; Bengtson, GG. 2, 350 A 1 参照。

⑫ 永しく、ハルパロスの財産は、アクロポリスに運ばれる途中、その半額を喪失したものと考えられていた。しかし、Adams (p. 134) により、デーモステネースは金銀横領罪によってではなく、牧畜の嫌疑によって起訴せられたことが、初めて明確にされた。

⑬ Deinarch. III, 1: *φάσκων κωλύσειν Ἅρπαλον εἰς τὸν Πειραιᾶ καταπλεῦσαι, στρατηγὸς ὑφ' ὑμῶν ἐπὶ τὴν Μουνυχίαν καὶ τὰ νεώρια κεχειροτονημένος*

⑭ 当時の暦は、B. D. Meritt, The Athenian Year, Berkeley and Los Angeles 1961, 104 ff., 133 による。また、W. B. Dinsmoor, The Archons of Athens in the Hellenistic Age, 1931, 372, 429 参照のこと。

⑮ Mathieu の説をそのまゝ受継いでいるものに、Treves, REA 36, 515 ff.; RE XIX, 1938, Sp. 2489 ff.; Colin, Hypéride, 234 ff.; Tarn, CAH. VI 450; Badian, JHSt. 1961, 42.

⑯ A. W. Gomme, The Population of Athens in the fifth and fourth centuries B. C., Oxford 1933, 67.

⑰ G. De Sanctis は、Gomme の説に反対し、歴史的蓋然性を強調する (Riv. di Fil. N. F. XV, 1937, 292 f.)。また、Treves, RE XIX Sp. 2489 f. 参照。

⑱ Hyper. c. Demosth. col. 18: [*Ἐπειδὴ δὲ νῦν Ἅρπαλος οὕτως ἐξαίφνης*][1] *πρὸς τὴν Ἑλλάδα*[2] *προσὲπεσεν ὥστε μηδένα προαισθέσθαι. τὰ δ' ἐν Πελοποννήσῳ καὶ τῇ ἄλλῃ Ἑλλάδι οὕτως ἔχοντα κατέλαβεν ὑπὸ τῆς ἀφίξεως τῆς Νικάνορος καὶ τῶν ἐπιταγμάτων ὧν ἦκεν φέρων παρ' Ἀλεξάνδρου περί τε τῶν φυγάδων καὶ περὶ τοῦ τοὺς κοινοὺς συλλόγους Ἀχαιῶν τε καὶ Ἀρκά[δ]ων [καὶ τ]οι[ού]τω[ν*[3] .....1 [*Ἐπειδὴ*..... *ἐξαίφνης*] Blass; 2 *Ἑλλάδα*, litteris *λα* in H supra *ελπιδα* scriptis.: *ἐλπίδα* Sauppe (philol. III,624) これについての批判は Schaefer, Jahnsjahrb. LXII, 1851, 237 参照。*πρὸς τὴν Ὀλυμπίαδα προσέπεσεν* Duhn, 42 A 13 この無理な読みは、この断章がハルパロスの第二回アテーナイ訪問に言及するものとする、彼の仮説より生ずる。3 *καὶ τοιούτων* Colin: *καὶ Βοιωτῶν* Blass.

⑲ ニカノールについてはBerve II, Nr. 557; RE XVII 267 ff. s.v. Nr. 4 参照。

⑳ アイトーリアー人については、R. Flacelière, Les Aitoliens à Delphes, 1937, 42 アテーナイ人については E. Bikerman, REA 42, 1940, 34 参照。

㉑ Colin, Hypéride, 1946 のテクストによる。

㉒ アテーナイ人がいかに驚いたかは Deinarch. III, 1; II, 4: *ὃν ἤσθεθ' ἥκειν καταληψόμενον τὴν πόλιν ὑμῶν* の表現から

も知られる。Grote XII² 297 参照。

㉓ アテーナイの飢饉については M. Rostovtzeff, Social and econmic history of the Hellenistic world, 1941, I 95 n. 29; Bengtson, GG 346 参照。

㉔ Adams, 130 n, 1; Berve II 78 f.

㉕ アンティパトロスの職務については Bengtson, Strategie I, 1937, 15 ff. 参照。

㉖ Adams, 129 n. 2; 135 n. 1 更に Holleck, 5 f. 参照。

㉗ フィロクレースを三二四／三年度のムニキアの将軍とすれば、いつヒフェーボイ監督の職を解かれたのかという疑問が生ずる。デイナルコス（III 15）の言及するヒフェーボイ監督の職とは、*σωφρονιστής* や *ποσμητής*（Arist. *Ἀθ. πολ.* 42, 2）を指すのではなく、むしろ、ムニキアの将軍職そのものを指す、と Adams（126 f.）は解釈する。というのは、Arist. *Ἀθ. πολ.* 42, 3 によれば、第一年目のヒフェーボイはペイライエウスに赴き、ムニキアやアクテーの守備にあたったから、ムニキアや港の将軍フィロクレースは将軍としてヒフェーボイの監督に当ったと考えられるからである。これについてはまた Körte 219 参照。その批判として Holleck, 4 f.; Mathieu, 162 参照。

㉘ デーモステネースのオリュムピアにおける行為を伝えるものは Dein. I 81–82; Plut. Dem. 9; [Plut.] 845 C のみである。しかし、これらからは彼の目的を知ることはできない。オリュムピアにおける彼の行為については Holleck, 9; Berve II, 138; Badian, JHSt. 81, 33 参照。

㉙ この部分は、パピュルスの破損しているため、明らかに解らないが、亡命者に関する布告と共に、アカーイアー人及びアルカディアー人などの同盟に何らかの制限を加えるための指令が齎らされたものと思われる。Niese, I, 177 A 2; U. Wilcken, S B Berlin 1922, 116 参照。

㉚ 亡命者に関する布告についての史料は Hyper. c. Dem. 18; Dein. I 81 f.; 103; Diod. XVIII 8, 4; Curt. X 2, 4; Justin. XIII 5, 2 ff. など。その他、次の三つの碑文は重要である Syll³. 306; 312; OGIS I, 2 これに関する文献については Glotz-Cohen, Hist. Grec. IV 1², 186, 217 参照。

㉛ アレクサンドロスがスーサに到着した時期に関しては、研究者により意見の相違はあるが、その研究の示すところによれば、三二四年二月以前ではなかった。二月頃とするもの Niese I, 157 n. 4; Droysen I, 241; Colin REGr. 38, 318; Berve, Griech. Gesch. II² 211° 三月頃とするもの Beloch, III 2, 320 f.; Schachermeyr, Alexander, 1949, 387° 春とするもの Wilcken; Alex., 194; Tarn, Alex. I, 109.

㉜ Wilcken, SB Berlin 1922, 115; Alexander, 200 f. 参照。

㉝ *διάγραμμα* の性格については E. Bikerman, Rev. de Phil. 1938, 299 ff.; REA, 1940, 25 ff. 参照。

㉞ 当時の交通事情については Rostovtzeff, Soc. and econ. hist. of the Helld, 1032 ff.; Tarn, CAH IV, 193 参照。（ロドトスによれば、スーサよりサルデェンスまで九〇日（V 53）、サルディスからヒフェソスまで三日（V 54）。ヒフェソスからペロポンネーソスまで、当時の旅行は必しも確実ではなかった

が(cf. Rostovtze ff, a. a. O. II, 1041 ff.)、悪天候のもとでも凡そ一週間以内に到達し得たろうと考えられる(cf. W. Kroll, RE II a 1, 1921, 108 ff.)。

㉟ ニカノールのギリシア到着の時期に関して、はじめてこのような推測をしたのは Badian, JHSt. 1961, 42 f. である。

㊱ レーナイア及び大ディオニュシアの期日は明確ではない(R. C. Flickinger, The Greek Theater and its Drama, 1960², 119)。しかし、ここではレーナイアをガメーリオーン十三日、大ディオニュシアをエラフェーボリオーン十日を初日とした。

㊲ デーモステネースの旅行日程については、無論、明確に推定することは不可能である。しかし、徒歩でいったものと仮定すれば、アテーナイからオリュムピアまで凡そ一八六四スタディオン(現在の道程三四六粁。三〇スタディオン=約三・四マイル〔Tarn, CHA IV, 193〕より)、当時の旅行者の一日の道程は一五〇及至二〇〇スタディオン(Herodotos V 53; IV 101)とすれば、アテーナイからオリュムピアまで約十日ばかりの日程を要したと考えてよかろう。クセノフォーン(Mem. III 13.5)によれば、五日か六日で行けたとも考えられる。

㊳ Badian, 43 参照。

㊴ アテーナイオス(XIII 595 E; 586 D)は、カタネーのピュトーンとビュザンティオンの弁論家ピュトーンとを混同する。ピュトーンについては Berve II, 338 f. 参照。

㊵ Grote XII, 296 n. 2; Beloch IV 2², 434 ff. 参照。

㊶ ハルパロスのアジア逃亡は、王がインドから帰還して後であるし(Diod. XVII 108, 6)、三二六年秋には、王はハルパロスの送った七千の歩兵に出会っている(Curt. IX 3, 21)。また、一年餘りもの間キリキアーに無事隠れ得たとは考えられない。Droysen I², 244 A. 1; Grote XII, 240 n. 3; Adams, 129 n. 2; Körte, 221 A. 1; Beloch IV 2, 434 f. など参照。

㊷ 「アゲーン」の断章(596 A–B)には次のような会話がある。「アッティカでは一体どんな運命が支配し、彼らはどうしているか」「彼らが奴隷の生活を肯定している間は充分に食っていたが、いまはたゞヤハズエンドウやウキキョウを食べ、小麦は全く食べていない」「しかし、聞くところによると、ハルパロスがアゲーンに劣らず無量の食糧を彼らに送り込み、市民権を獲たという話だが」「それはグリュケラの食糧だ。恐らくそれが彼らにとって、遊女の手付でなく、破滅の手付となるだろう」。

(イ) かってアテーナイは奴隷の生活に甘んじていたが、いまは自由を獲得しようとしている、という意味のこの断章にみえる句は、アテーナイがハルパロスを受入れるであろうという推量の意味にも、また既に受入れたという結果的意味にも解し得る。(ロ) ハルパロスが第一回アテーナイ来訪の際入国を拒絶せられたことが、もしアレクサンドロス陣営に知られていたとすれば、最後の威し文句は用いられなかったであろう(Colin, REGr. 36, 320 f.)と考え、「アゲーン」上演は、その第一回来訪の事実が知られない以前のことと仮定された。しかし、第一回は無論、第二回来訪の事実も、もし既に知られていたとすれば、やはり最後の威し文句は用いられたであろう。「アゲーン」はサテュロス劇であるから、最後の威し文句は、推量的

にも、また事実的にも解し得るのである。少くともこの断章は、当時アレクサンドロス陣営に、アテーナイに対する攻撃的な空気が漲っていたことを示している。

⑬ ギリシアに起った事件が、幾日を経てアレクサンドロスに伝えられたか、正確に知ることは不可能である。普通の使者の場合、ギリシアからスーサまで百日ばかりを要した、註(34)参照。しかし、重大な情報には急使が飛んだ。そのとき、エフェソスからスーサに通ずる所謂「王の道」を走ったと思われるが、そこには百十一の宿駅あり、宿駅毎に人馬を換えて伝令を走らせ得た。その設備状態は、江戸時代における東海道のそれより不備なものと考えられる。江戸時代の飛脚速度（百二十餘里を宝暦十三年に最も早くて六十八時間）を参照に概算すると、エフェソスからスーサまで、少くとも十五日はかかったろう。悪くそれ以上であったろうと思われる。Tarn (CAH IV, 193) は一週間以内と推定するが、それはむしろ空想に近い。「王の道」については Bengtson, GG 130 f.; Tarn, CAH IV, 193; W. M. Ramsay, The Historical Geography of Assia Minor, Amsterdam 1962, 27 ff. 参照。

⑭ 当時恐怖に落入ったサトラップや将軍の状態について Badian JHSt. 81, 16 ff. また Badian, TAPhAss. 91, 324 ff. を参照のこと。

⑮ Kleiner, Alex. Reichsmünzen, 29 ff. 参照。

⑯ 当時のアジアにおける傭兵問題については Badian, JHSt. 81, 25 ff. 参照。

⑰ 当時のアテーナイの人口については A. H. M. Jones, Athenian Democracy, Oxford 1960, 76 f.; Gomme, JHst. 1959, 61 f. 参照。因みに、古代におけるギリシアの傭兵問題については E. Balogh, Political Refugees in Ancient Greece, Johannesburg 1943 参照。

⑱ Hyper. c. Dem. 31; Dein. 1 94 デーモステネースは、はじめアレクサンドロスを神とするに反対、後、彼のオリュムピア旅行後、その現実に即した政策にそい、当時の情勢より、アレクサンドロスを神とすることに同意する。

（ドイツ・ヴェルツブルグ大学に留学）
（昭和三九年五月帰朝）

style, were introduced into Japan as they were. As in Japan, at first, the four-cornered *Chi-Nei* system of *P'ing-Ch'êng* style was established, and then introducing the *Yeh* style *Chi-Nei* was established as including four or five countries near the Capital *Kinai* 畿内 in *Taika* Reformation 大化改新 was the *P'ing-Ch'êng* style and that in *Asuka-Kyo* 飛鳥京, *Heijô-Kyô* 平城京, or *Heian-Kyô* 平安京 was the *Yeh* style.

Einleitung in die Forschungen des Harpalos

——Chronologie——

by

Yasumi Nagai

In den Studien des Harpalos, die für das Verständnis der damaligen attischen Geschichte so sehr wichtig sind, daß man darüber lange über ein Jahrhundert diskutiert hat, bleiben jedoch noch einige unklare Fragen wegen Mangels an Quellen und im besonderen über die Festsetzung der bis jetzt noch nicht anerkannten Chronologien.

Durch eine jüngst erfolgte Entdeckung, die in der Festsetzung der Chronologie eine große Rolle spielt, wird man aber die Geschichte des Harpalos von neuem abfassen müssen; es ist dies die genaue Festlegung des Datums der Olympischen Spiele im Jahre 324 v. Chr. Damit hat E. Badian (JHSt. 1961, 16 ff.) neuerlich die Chronologie des Geschichte des Harpalos festzusetzen versucht, die m. E. noch einiger Zusätze bedarf.

Hier möchte ich die Chronologie durch kritische Betrachtung der Quellen und der bis jetzt erfolgten Studien kurz ergänzen.

Reconstruction of *Chu Ssu-pên's* 朱思本 Map of China

by

Kazutaka Unno

Chu Ssu-pên's 朱思本 *Yü-ti-t'u* (輿地図, Terrestrial Map), one of the representative maps brought out under the Yüan Dynasty, is no longer extant but survived by the *Kuang-yü-t'u* (広輿図 Enlarged Terrestrial